

須臾の間

医療法人南眼科 院長 南 求

私は北区天神橋に縁あって2001年に開業して2021年7月でちょうど20年になる。

京大の先輩で北野病院副院長であられた菅謙治先生が2000年に開業されたが体調を崩され、その後を任されたものである。

20年、長くもあり短くもあった。ふり返って時の流れを感じたものを2つ、変わらないものを1つ挙げてみたい。

医学生の中からパチンコが好きでポリクリや実習以外の講義はよくサボって開店(10:00AM)または昼頃から閉店(10:30PM)までパチンコを打つことが多かった。

4回生(1982年)の頃フィーバー機(デジタルが333)または777で3つ揃うと出っぱなしになり5分間で4,000発1万円ほどの出玉が得られる」というエキサイティングな機種が登場した。

友人がいた生野区今里のパチンコ店で初めて333が揃って大当たりを引いた時の感動は今もよく覚えていいる。盤面上は2/1000の確率しかなく、どうせ当たらないだろうと思って、フィーバー機のハンドルを固定して打った状態にしてフィー

バー機以外のシマの台を打っていると私のフィーバー機のとなくで打っていたおばあちゃんが、「にいちちゃん、かかっているで」と呼びに来てくれた。戻ってみると333(平和のブラボースペシャルという機種)のデジタルが点滅しながら玉がどんどん出て来ている。放置すれば玉があふれてとばなくなりパンクしてしまふ。フィーバーもうれしかったが大阪の下町のおばあちゃんの人情味がとてもうれしかった。

5回生、(6回生)の頃は絶好調で1日平均18,000円ほどの収入があった。負けにくい台(よくデジタルが回り玉の減りにくい台)を見つけて打てば自ずと勝てるということまで5回生の頃は年間300万円ほど勝ち、このままパチプロになった方が幸せかなあとよく思った。

その後、福島区の関電病院に13年ほど、大阪日赤に10ヵ月ほどいた頃も休日はよくパチンコ店に足を運んだ。更に開業してからも休日はよくパチンコを打った。

2005年7月、8万発、19万円を出したのがベストで、その店の記録を一気に1万2千発上回る出玉だった。この年は年間179万円ほど勝った。

全盛期のピークが2つあって1983年頃と2005年頃だった。1回目のピークの良い台は玉のへり方がゆるやかで1日打っても2万円ぐらいしか打ち込まない。それ以上出せば勝ちで1回の勝ちが少ないがほとんど負けることがなく、1

日平均18,000円ほど勝っていた。

2回目のピークは三洋の大海シリーズが他の機種を席卷していた頃。良い台は1,000円でデジタルが30〜35回回るので1日10回ほどフィーバーすれば引き分け、30回くらいフィーバーすると10万円くらいの勝ち、8万発出した時は53回かかりドル箱を47杯積み上げた。(写真参照)



しかしその後は2010年頃から次第に勝つ額が減っていった。打ちに行く回数も激減し、2019年4月を最後に行かなくなった。今振り返ればとても良くわかるのだが、2010年頃からIT技術の進歩で、出玉を店全体でプログラミング出来るようになりパチンコ台の表の盤面は変わらないが、基盤が変

わってしまったのだった。台にすわった途端にフィーバーするが突然出なくなり、一日勝負して打ち手のペースで勝ち抜けることがなくなった。今はパチプロで食べて行ける人はいないのではないだろうか。

もう1つ時の流れを感じたものはワインである。

1997年4月当時勤めていた関電病院の内科の部長先生から電話がかかってきて黒門にある六覚燈という串かつとワインの店でDRC(ロマネ・コンティ社)のリシユブル1976年というブルゴーニュワインを飲ませていただき、フランス貴族の400年の歴史が見える様な気がして「ああ、これがワインか、芸術なんだな」と、とても衝撃をうけ、ワインを勉強しようという気になった。六覚燈はその頃、行く度にDRCを出してくれて心地良い時間をすごさせてくれた。

2002年だったと思うが眼科医6人で六覚燈でロマネ・コンティを飲む会があり、モンラツシェ(DRCの白ワイン)1981、ロマネコンティ1959、1976、1973(マグナム1,500ml)を飲んだことがあったが6人で180万円でコンティとしてはふつうに飲める価格であった。DRCの赤の上位3本(ロマネコンティ、ラターシュ、リシユブル)は複雑さにおいて傑出しており、酸化に伴い時間と共に大きく変化する特徴がある。2000年のリシユブルは最後はコーヒーの味わいまで変化した。

1999年頃、関西ソムリエ協会の国際部長をしておられた川角さんというソムリエさんがロマネコンティが年に100本は関西に入ってきていますと言っておられた。その頃はまだ日本が経済大国であったため一流どころのワインが適正な価格でどんどん日本に入ってきていた。ロマネコンティは15万円ほど、DRC No.3のリシュブールは3万円ほどだった。

やがてIT革命とグローバル化によって、中国が急成長し、一握りの情報関連企業（GAFAM）に巨額の富が集中し、格差が拡大して超富裕層が出現した。

それに比例するようにDRCのワインは値上がりをつづけ、2011年頃からはワイン愛好家が適正と思う価格では入手困難となった。正規輸入代理店は輸入してすぐ売るより何年かストックして売るのが高値で売れる様になったため小売をしなくなってしまった。

今ロマネコンティは300万円、リシュブールは60万円ほどで、2000年頃と比べると20倍ぐらいの高値になっている。

ロマネコンティはコンティ公（ルイ15世のいとこ）が1760年にこの畑を手に入れて死去するまでワインを独占した。そういう歴史を考えると今新たに生まれた特権階級がこのワインを独占してもおどろくにはあたらないのかも知れない。

私はたまたま最高峰のワインを飲む機会に恵まれた時代にはただけなのかも知れない。

最後に、変わらないと感じるものひとつ。

私は細かい手作業が子供の頃から好きで医者をするなら長い間続けられる手作業が多い科がいいと思いき眼科を選んだ。内眼手術（白内障や網膜硝子体手術）が面白く、もっと上手になりたい、もっと安全で完成度の高い手術がしたいという思いは研修医時代初めて執刀させてもらった時から今も変わらない。

内眼手術は微妙な違いを的確に見分けて処理することが大切でパチンコで玉のはね方の微妙な違いに気付いて、出る台を見分けるのと良く似ており、眼科を選んで正解だったと思っっている。手術の特技が眼内レンズの進化などで10年ほど前から大きく進歩して、白内障手術ではそれまでの大きな切開幅ではどうしても避けられなかった倒乱視化がおこらない小切開（2mm台）手術が可能になり、眼球のintegrityが良く保たれる様になり、とても心地良い。

これから年齢と共にどう変わるのかは判らないが職人の方々やピアニストなど演奏家の方々がいつまで続けておられるかが、参考になるのではないかと思っっている。気持ち自体は3つ子の魂100までなのだろう。

時の流れというテーマでは以上だが、古希を機に時間を作って、日本が生んだ最高の天才的個性と言える空海の原典を編集した「定本弘法大師全集」を読んで空海の本当の姿を少しでも垣間見ることが出来たら幸せだな・・・と思っっている。